［研究ノート］

幼児期に育みたい資質･能力とは
～教育課程の編成を通して考える～

池上由紀子

［キーワード：幼児教育、教育課程、教育要領、育成をめざす資質・能力］

１．はじめに

平成 29 年 3 月に改訂、告示された幼稚園教育要領において、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が示された。また、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』として 10 項目が挙げられた。これらの姿は、幼稚園における教育活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものとして示されている。

幼稚園教育要領には、「資質・能力は個別に取り出して指導するものではない」「発達の実情や、興味や関心を踏まえながら展開する活動全体によって一体的に育むもの」とされている。が、ともすれば『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』をめざす方向、すなわち目標に置き換える、「この活動をすればこの姿が育つ」と短絡的にとらえる、などの考え方に陥らないようにしなければならない。筆者は長く幼稚園教育に携わってきた立場から、今回の改訂の意図を現場でどのように受け止めるとよいのか、「幼稚園において育みたい資質・能力及び幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を実践においてどのように扱うとよいかを、教育課程の編成を通して考察したいと考えた。

２．新しい時代に必要となる資質・能力

近年、知識・情報・技術をめぐる動きは、加速度的に変化しており、社会変化が人間の予想を超えて進展するようになったと言われている。このような変化の中で、場面や状況をとらえて自ら目標をもち、その目標の実現に向けて情報を収集し考え、よりよいものを創り上げようとする主体的な人間の育成が求められている。その際には一人の力ではなく社会とのつながりの中で他者と協働することが大切である。

小学校学習指導要領及び幼稚園教育要領の前文には以下のような記載がある。

小学校学習指導要領　前文

（略）これからの学校にはこうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。（略）

幼稚園教育要領　前文

（略）これからの幼稚園には、学校教育の始まりとして、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる。（略）

幼稚園においても、求められる人間像は同様である。情報化・グローバル化などの急激な社会的変化の中でも他者と協働して未来を創造することのできる人間を育てることが、現代の教育の課題であるとされている。

このことを受けて学習指導要領、幼稚園教育要領が改訂されるに至った

が、その中で学校教育（幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学）全体として共通に育成すべき力が示された。

◆生きて働く**知識・技能**の習得
　何を知っているか、何ができるか
◆未知の状況にも対応できる**思考力・判断力・表現力等**の育成
　知っていること・できることをどう使うか
◆学びを人生や社会に生かそうとする**学びに向かう力・人間性等**の涵養
　どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか

３．幼稚園教育における「資質・能力」の捉え

上記の共通に育成すべき力は、幼稚園教育要領において以下のように示された。

幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、この章の第１に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むように努めるものとする。

◆豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「**知識・技能の基礎**」
◆気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「**思考力、判断力、表現力等の基礎**」
◆心情、意欲、態度が育つ中で、より良い生活を営もうとする「**学びに向かう力、人間性等**」

幼児教育においては、２項目に関して「基礎」という言葉が使われている。ものの操作を繰り返しながら技能が身に付き知識が得られるといった

ように、知識と技能が一体として育まれるという幼児期の発達の特性を示しているからである。思考力、判断力、表現力についても同様である。「基礎」の意図することは、環境を通して行う教育の基本「身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気付き、これを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる」という見方、考え方そのものである。先にも述べたように、これらの資質・能力は個別に取り出して指導するのではなく、幼児の発達の実情や幼児の興味や関心等を踏まえながら展開する活動全体によって一体的に育むものとされている。

４．幼児期の発達において重視すべきこと

（１）脳の発達

生後すぐの乳児の脳の重さは約 400 ｇ、成人の脳は約 1400 ｇ、５歳ではおおよそ 1200 ｇであると言われている。乳幼児期の脳の重さの激増は、骨格や筋肉の増加によるものだけではなく、脳内の神経回路の増加・構造化によるものであると言われている。脳のシナプスは２歳まで増大し、それ以降刈り込みにより重要なシナプスを残しその数は減少するが、情報伝達の速度や強さを増すために残ったシナプスは、強く・太いものになる（髄鞘化）とされている。

さらに、脳は「生きていくために最低限必要な機能をつかさどる古い脳」（大脳基底核、大脳辺縁系）と、「うまく生きていくために必要な高度な運動、認知の機能、知的な面等の機能をつかさどる新しい脳」（大脳皮質、小脳）に大別される。新しい脳がうまく発達するためには「古い脳」がしっかりと働かなければならず、睡眠・食事・排泄などの日常生活リズムの確立によって、その機能が十分に働く。そのうえで、様々な刺激への対応のための神経回路がつくられていき、新しい脳が働くようになっていくとされている。

６歳と３歳の子どもに実施したいわゆる「マシュマロテスト」（５分待てばもう一つあげるという条件下で我慢できるか）では、６歳児は我慢で

きるが３歳児は我慢できなかったとする実験結果[1)]がある。６歳児は活発に前頭前野が働いていたが、３歳児は十分に働いてはいなかった。「食べたい」という本能的な欲求は「古い脳」で生み出されるのに対し、「我慢しよう」という欲求を押さえる働きは、「新しい脳」の前頭前野がつかさどっている。６歳児は、前頭前野の働きによって我慢できたが、３歳児の脳はまだ十分に前頭前野が働いておらず、神経回路がつくられている真っただ中であると言えよう。すなわち古い脳がつかさどる「欲求」を押さえられないのは、性格ではなく今まさに脳が発達しているときととらえることが必要である。

このことを踏まえて教育活動を展開することが求められていると考える。「欲求」の抑制機能がつくられる幼児期にあっては、気持ちを受け止める援助と幼児の理解力に応じた解決の方法の提案をする援助が必要であり、そのプロセスが重要である。

（２）非認知的能力の育成

ジェームス・ヘックマンは、「ペリー就学前プロジェクト」[2)]の結果から次の２点を指摘した。１点は、「質の高い幼児教育を受けることにより、その後の学力の向上や将来の所得向上、犯罪率の低下等につながる。よって幼児教育への投資が重要であり、効果的である」。もう１点は、「幼少期に非認知的能力を身につけておくことが、大人になってからの幸せや経済的な安定につながる」というものであった。特に着目したいのは２点目である。数的な能力や言語的能力のような認知的能力に対して、非認知的能力は社会情緒的側面、例えば、安定して自分を発揮する力、がんばる力、他者との関係を築く力などである。このことは信頼できる大人と子どもの自然な関係性が保たれ、友達との関わりの中で興味をもったことに十分に関わる生活の中で育つことの重要性を指摘していると考えられる。

そこで重要な意味をもつのが「愛着（アタッチメント）」である。遠藤利彦は「アタッチメントは『くっつく』ということなので『独り立ち』とは矛盾するように感じるかもしれません。もし特定の大人にべったりくっつ

く『依存』のようなイメージを持っているとしたら、確かに『独り立ち』は相反する印象です。しかし、くっつき、安心する経験を重ねる中で、特定の大人という心の拠り所を得て、何かあったらあそこに行けば守ってくれると思えるから、子どもは元気よく外の世界にとび立ち、様々な活動ができるわけです。これを『自律性』といいます。『依存』とは真逆です。言い換えれば、子ども一人一人の独立性や自律性か、特定の大人との信頼に満ちた関係（二者関係）を通して育まれていくということになります。ここに注目しているのがアタッチメントという考え方です」と述べている[3)]。人への信頼感を育み、人と関わることの喜び、楽しさを味わう経験の蓄積が、新しい時代に必要となる資質・能力につながっていく。信頼できる大人と子どもの関係性（＝アタッチメント）の中で育つことが重要である。

また、「幼少期に非認知的能力を身に付けておくことが、大人になってからの幸せや経済的な安定につながる」というヘックマンの指摘は、日本の教育課題である自らの人生を切り拓くことのできる主体的な人間の育成につながるものととらえられる。未知の問題解決に取り組む力を育てるためには、幼い時期からがんばる力、自己を発揮する力、他者との関係を築く力などの非認知的能力を育てることが必要であり、可能であり、しかも有用である。

５.「新しい時代に必要となる資質・能力」を踏まえた教育課程の編成

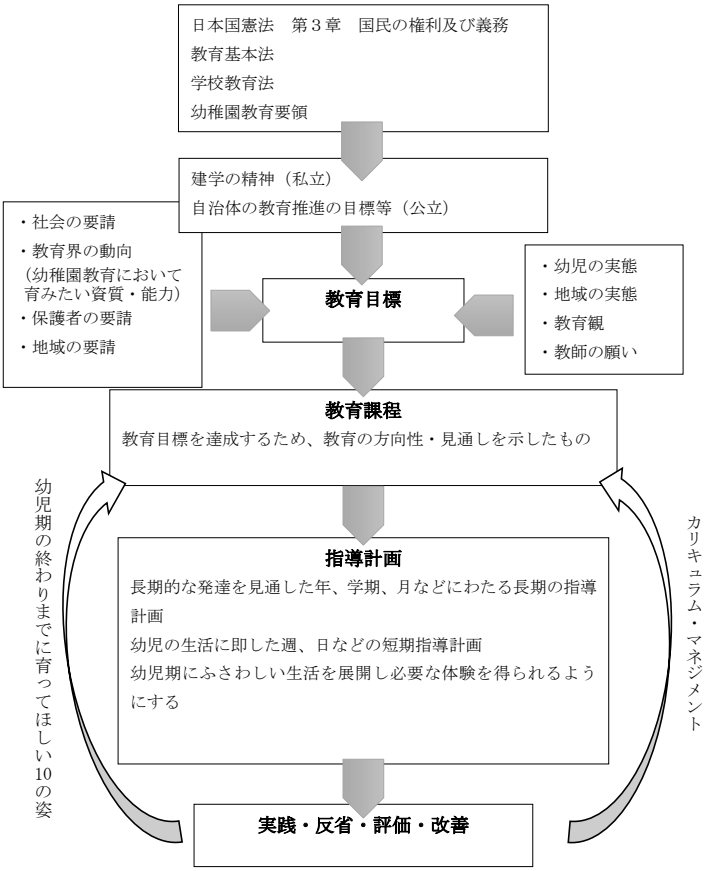
（１）教育課程の構造

公教育においては、全国的な教育水準を維持し、全国どこにおいても同水準の教育を受けることのできる機会を国民に保障する必要性から、法令により種々の定めがなされている。幼稚園においては、幼稚園教育要領第１章総則　第３項「教育課程の役割と編成等」において「各幼稚園においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令ならびにこの幼稚園教育要領の示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園

及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとする」とある。

一般的に教育課程の編成にあたっては次の図に示す手順を踏む。園の教育目標を実現させるために教育課程を編成する。実施に当たっては指導計画を立案し、実践、反省、評価、改善の PDCA サイクルによる改善が図られていく。その際、教育課程に基づいて教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントを実施することが求められている。

一連の流れ、構造を表したものが（図－１）である。



図－１．教育課程編成の構造図

（２）教育課程表（試案）

「新しい時代に必要となる資質・能力」の育成を目指し、教育課程を編成するにあたって、筆者は３つの資質・能力をどのように育成すべきかを項目ごとに整理した。また、幼稚園生活を４つの時期に分けた。「初めての集団生活の中で様々な環境に出会う時期」、「個々の遊びを充実させていく中で友達との関わりを楽しむ時期」、「遊びを充実させていく中で友達との関わりを深める時期」、「友達関係や学び合いが深まる時期」とした。幼児期は月齢によっても生育環境によっても個人差が大きいため、大きなくくりで考えるべきととらえた。

その際、３つの資質･能力ごとに必要な経験を括りだし、試案を作成した。

試案を作成するにあたっては、「４、幼児期の発達において重視すべきこと」で述べた脳の発達に関連させて、じっくりと遊ぶこと、友達との関わりの中で自己を抑制する力が育まれることを踏まえた内容にした。また、アタッチメントの形成にも目を向け、大人との信頼関係の上に幼児が自分の世界を広げていくことを念頭において、教育課程表の中でその時期に必要な経験として表した。

加えて、家庭との緊密な連携を図ることが求められていることから、在園児保護者に対する子育ての支援に関わる内容を掲載した。このことは、保護者と園とが共に子どもを育てるという意識が高まるようにし、ひいては家庭における教育力の向上を図ることが目的である。また、子どもの発達などに不安をもつ保護者もいることから、共に考えるという姿勢をもつことがますます求められると考えたからである。

なお、本教育課程表（試案）の作成にあたっては、筆者が過去に編成・作成に携わった２つの園の「教育課程・年間指導計画」[4)]、「育ちの過程表」[5)] を参考にした。

教育課程表（試案）

新しい時代に必要となる資質・能力		
学校教育全体	幼児教育	具体的事項
生きて働く知識・技能の習得	**学びや生活の中で豊かな体験を通して感じたり気付いたり分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」**	・基本的な生活習慣の獲得 ・様々な気付き、発見の喜び ・規則性、法則性、関連性などの発見 ・日常生活に必要な言葉の理解 ・身体的技能や芸術表現のための基礎的な技能の習得　等
未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成	**気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」**	・試行錯誤、工夫 ・予想、予測、比較、分類、確認 ・他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさ ・言葉による表現、伝え合い ・振り返り、次への見通し ・自分なりの表現　等
学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間力の涵養	**心情、意欲、態度が育つ中で、より良い生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」**	・思いやり ・安定した情緒 ・自信 ・相手の気持ちの受容 ・好奇心、探求心 ・葛藤、自分への向き合い、折り合い ・話合い、目的の共有、協力 ・自然現象や社会現象への関心　等
		家庭との連携 子育ての支援

教育課程表（試案）つづき

3歳入園当初	
初めての集団生活の中で様々な環境に出会う時期	個々の遊びを充実させていく中で友達とのかかわりを楽しむ時期
必要な経験	必要な経験
教師を拠り所にしてやりたい遊びを楽しむ ・園での生活の仕方を知る ・教師と一緒に身の回りのことをする ・目についた遊びや経験のある遊びに興味をもって楽しむ ・自分の行為の面白さを感じ何度も繰り返す	いろいろな遊びに興味をもち、楽しむ ・身の回りのことを自分でできるようになることを喜ぶ ・好きな遊びを見つけて遊ぶ楽しさを感じる ・面白いと思ったことを繰り返し、法則性などを自分なりに見出すことを楽しむ ・様々な方法で表現することを楽しむ
・自分なりに表現することを楽しむ ・教師や友達と場を共有しながら遊ぶことに楽しさを感じる ・表した思いに対して教師や友達の共感を得て喜ぶ	・友達のしていることに興味を抱いて、見たりまねをしたりする ・イメージや考えを自分なりに実現して遊ぶ楽しさを感じる
・教師や環境に安心感をもつ ・教師を拠り所にして生活する	・友達のしている遊びに興味をもち、友達と同じ場で遊ぶことの心地よさを感じる ・同じ場にいる友達との触れ合いを楽しみ相手の気持ちに触れる ・教師の援助を受けながら自分の気持ちを立て直す ・身の回りで起こる自然現象に関心をもつ
園の教育方針・内容を、便り、保育参観、懇談、ポートフォリオ、	
・保護者が安心して園に通わせられるよう、一人一人の様子をこまめに丁寧に伝える ・友達同士のトラブルなど保護者が不安に思うことについては、状況や対応などを丁寧に伝える	・幼児の姿を、発達上必要な経験として具体的に伝える ・幼児の育ちの過程を見通しとともに伝え、保護者が安心できる ・遊びを通しての学び、友達や異学年、地域の方々などと関わ ・運動会や生活発表会など、行事の意義・ねらい・行事を通して図るとともに、子どもの成長を感じられるようにする ・保護者一人一人の声を拾い、丁寧に説明したり解決方法を共支援を行う

6歳修了時

遊びを充実させていく中で友達とのかかわりを深める時期		友達関係や学び合いが深まる時期	
必要な経験		必要な経験	
友達と共通の目的に向かい、遊び自分の力を発揮する	・自分なりの目標や目的に向かってじっくりと取り組み、実現する楽しさを感じる ・自分のイメージを実現するための表現を工夫することを楽しむ	自分の成長を喜び、自信をもって生活する	・自分(たち)の目的に向かって取り組み、最後までやり遂げる満足感を味わう
	・気の合う友達に思いやイメージを伝えたり、相手の思いを受け止めたりする ・相手と折り合いをつけるために自分の気持ちを言葉で伝えようとする		・自分の気付き、発見などを友達と伝え合う楽しさを味わう ・集団の中で自分の力を発揮しながら、友達と考えや力を合わせて遊びを進めることを楽しむ
	・相手の気持ちを受容できないなどの葛藤を自分と向き合いながら立て直そうとする ・友達と目的を共有して遊び、仲間と遊びを進める楽しさを味わう ・身の回りにある社会現象に関心をもつ		・いろいろな友達の良さを理解し、認め合ったり助け合ったりする

登降園時などあらゆる機会を通して、十分に理解を得られるようにする

ようにする
ることで育ちの重要性を様々な機会を通して伝える
育ちが期待できることなどを伝え、園の教育への一層の理解を

に探ったりする。必要に応じて、相談機関等につなげるなどの

・子どもの成長を保護者が感じられるよう、これまでの成長の過程を振り返る
・安心して入学を迎えられるよう、小学校の協力を得ながら小学校生活に見通しがもてるようにする

６．まとめ

幼稚園教育要領の改訂に際して示された、「幼稚園教育において育みたい資質・能力」は、相互に連動し合うものであり、はっきりと区別できるものではない。教育課程表（試案）作成の過程においても、文章表現で意味合いの違いを表現することが難しかった。このことは、３つの資質・能力は個別に取り出して指導するのではなく、幼児の発達の実情や幼児の興味や関心等を踏まえながら展開する活動全体によって一体的に育まれるものであることを示している。また、幼児の姿を読み取るときの視点であり、教師が保育を省察するときの視点である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については、この教育課程表（試案）では取り上げず、教育課程の構造図に示した。

幼児教育は、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活を展開していくこと、遊びを通しての指導を中心として５領域のねらいが総合的に達成されるようにすることが基本である。今回の試案作成により、幼児の豊かな学びとは何か、幼児にどのような力を育てるべきなのか、それはどのような経験によってもたらされるものなのかについて考える一つの契機になったと考える。

参考文献

１）NHKスペシャル「ママたちが非常事態!?」（DVD）より、上越教育大学発達心理学研究室（森口佑介准教授）の実験より
２）「ペリー就学全プロジェクト」とは1960年代のアメリカ・ミシガン州において、低所得層の３～４歳の幼児123人を対象に行われた調査である。そのうちおおよそ半数の幼児に、遊びの計画、実施、改善の話し合いをさせる教育を実施し、それが将来にどう影響するかを長期的に調査した（文部科学省「今後の幼児教育の振興方策に関する研究会（第４回）」資料、2008より）
３）遠藤利彦「赤ちゃんの発達とアタッチメント」（ひとなる書房）2017.8
４）札幌市立もいわ幼稚園「教育課程・年間指導計画」2009.3
５）札幌市立白楊幼稚園「園内研究のまとめ”ステップ・育ちの過程表”」2017.3